



## 文章は発酵する

A Sentence Should be Ripe

武田 信生

Nobuo Takeda

EICA 名誉会員・京都大学名誉教授

自分は所謂“もの書き”ではないが、それでも今までには随分沢山の“ご用命”をいただいて、原稿を書いてきた。このような原稿を「依頼原稿」という。学術雑誌などに掲載してもらうために書く論文原稿と依頼原稿とは、違うところもあるし、同じようなところもある。論文原稿は基本的にはいつ書きあがってもいいが、依頼原稿には締切日がある。もちろん、論文原稿であっても講演発表に繋がっているものには締切日がある。しかし、論文原稿は著者から雑誌などに“投稿”するものであるから、間に合わなかったら出さなければいい。ところが、論文発表が何らかの資格、ポスト、賞、研究費などの条件と結びつくと（多くの場合に関係があり、近年ますますこの間柄は強く、厳しく、定量的、かつ直接的になってきている）、研究者にとってはのんびり構えていられなくなる。研究者が追いつめられて剽窃やデータ捏造などという研究不正に奔る例が目立ってきていることは、この関係性の強化、研究のグローバル化などと関係していることは間違いなからう、……と、はなしはいつの間にかどんどん最初の意図とは違うところに行ってしまった。

依頼原稿を引き受けた人は誰もが経験することであろうと思うが、引き受ける段階では、締切日はだいたい先のことなので十分余裕を持って書けるだろうと、高を括って引き受けてしまうものなのである。ところが、当初どんなに日程の余裕があったとしても、原稿を依頼されている（つまり契約関係にあるという事実）が頭に蘇ってくるのは締切日近くなってからなのである。あわてて仕事にかかろうとするのであるが、そこで「生みの苦しみ」がはじまる。かの田辺聖子女史がいわゆる「神さんが降りて来ん」という状況が発現するのである。「神さん」さえ降りて来てくれれば、あっという間に仕上がってしまう筈の原稿が一行も進まない。そんな状況が必ずといっていいほどに発生してくるのである。原稿を引き受けた時には気楽に構想していたことが、いざ文章にしてみようととりかかってみると、とんでもない幻想であったことに気付くことさえある。締切日に近くなってきてもいよいよ神さんが降りて来ん。書きたいことは幾つも頭の中を駆け巡っている。だけど、書けない。やっとの思いで書き上げ

たところで締切日が来る、慌てて原稿を送り出す、ということになってしまう。

今回は、「文章は発酵する」というテーマである。「書き物」は無機的であるように見えるが、なかなかどうして、有機的であり、もっといえば「生き物」なのである。手元をはなれると、原則的に変えることは許されない。もちろん、校正段階でマイナーな変更は容認されるが、基本的には著者、編集者、印刷者の間の齟齬を埋めること以上のことは許されない（はずである）。

文章は発酵する、熟成するといってもいい。したがって、文章は書いてすぐに外へは出さないで、少なくとも一昼夜以上、できれば3日は手元に置いて発酵させるべきである。自分の経験では、仕上がってすぐに出したものはどうもよろしくない。若い時つまり駆け出しの頃、仕上がってすぐに教授に提出した原稿は差し戻されたり、朱書きで真っ赤にされて戻ってくるが多かった。手元にしばらく置いておくと必ず手直ししたいところが出て来る。その手直しによって必ず良くなる。原稿が仕上がったあとは、その原稿のことは意識の世界から離れてしまっているはずなのであるが、ふとした拍子に手直しすべきことが頭に浮かんで来る。多分、その原稿のことが頭のどこかに置かれていて、無意識のうちに反芻されているのだと思う。

世のあり方はこの二、三十年の間に随分かわったと思う。通勤電車に乗っても新聞を読んでいる人はほとんどいなくなって、ゲームかスマホにかかりきりの人が多い。列にならぶ人はいても、“待つ”“人がいなくなった。駅などにポツンと待つ人が昔はあったように思うが、そのような人が今はいない。世の中が忙しくなって、発酵（熟成）を待つ人が少なくなってきたのは、一次産業（“待ち”の産業）が細り、二次産業（“量”の産業）、三次産業（“スピード”の産業）への移行が進んだことと関係するのではないかと思っている。情報は次から次へと更新され、留まって吟味されることなどなくなってしまった。「知性」が復権するためには、文章は発酵を待ち、十分な吟味を経て発報されるようにならねばならないのではないだろうか。